

【エッセイ】福祉のある風景というと、彼女のことを思い出す。

彼女は有名大学の在学中に社会福祉士の資格を取り、新卒で成人知的障害者の入所施設へ就職した。私の同期だった。

知的障害者というと別世界の存在に感じられる人もいるかもしれないが、約62万人の知的障害者が在宅で生活しているという現実がある。この数字はいくつかの県の人口より多い。知的障害というものは、世間に当然に存在する身近な障害なのだ。

彼女も、彼らを普通の存在として受け止めていた。助けてもらえば感謝し、傷付けてしまえば謝罪していた。利用者と一緒によく笑い、ときに泣いていた。言葉どころか、こちらの思いさえも通じているか判然としない彼らに、敬意と真心、そして熱意をもって接していた。

しかし、より良いと思われる支援方法や職場環境の改善案を提出しても、変化を嫌う上司や周囲にはなかなか受け入れられなかった。採用されたとしても、統一した支援の必要性が身に付いていない職員たちの個人プレーによって失敗した。一部の利用者は、彼女の真摯な対応に暴言や暴力で答えた。やがて彼女の笑顔は曇りがちになり、ついには心を病んで退職していった。

将来の進路を選ぶ際は、誰しも自身と向き合い、己の長所や志向について考えると思う。医師や弁護士になろうという人は、頭が良いに違いない。スポーツ選手や自衛官を目指す人は、体力に自信があるだろう。

では、福祉業界で働く人たちは、なにを自身の強みとみて、その分野へ進んだのだろうか。高齢者、障害児・者の介護、生活支援。虐待されている児童の保護。生活に困窮している家庭の支援。路上生活者の保護。刑務所や少年院を出た人の支援。

私は、これらの仕事に就いている人の特徴は「優しい人であること」だと思う。優しいという字は、人を憂うと書く。社会的弱者に寄り添うことを生業とするにあたって、これほど相応しい素養があるだろうか。福祉の道に進もうという貴方は、きっと優しい。そして、彼女は間違いなく優しかった。彼女を見て、私も優しくなりたい、優しくありたいと強く感じた。彼女のいる風景が、福祉のある風景だった。

彼女とはときおり連絡を取っている。その後は障害者の就労支援の仕事に就いており、日々奮闘している様子だ。今でも彼女は福祉そのものだろう。私もいつか福祉のある風景の一部になれるよう、この仕事を続けていこうと思う。